

牛盗人

「善人になりたい」無批判に暮した人たちも一度はこの願いを持たねばなりません。善人になりたいという願いは若い人ほど強いと存じます。

形ほど出来て目覚めない青年団。目覚めの第一歩は皆の頭にこれではならんと、その空気がちがってくる。毎夜集つては、卑俗な俗歌や、猥褻な雑談で夜を更かすようなことがなくなつて、読書がはじまる。修養がはじまる。

「善人になりたい」それはもちろん尊い願いである。嬉しいことである。一途に進んで行かねばならぬ。けれども修養日誌が出来たり、精神修養の書物を読んだり、朝起きを實行したり、そうした会の幹事になつて働いたりして、天晴れ修養の出来た聖者になつた気になることは恐いことであり、あさましいことでもあります。

本当に善人になりきれぬものが、善人らしい仮面をかぶつたり、もしくは善人らしく気取つていたりすることほど、見苦しいことはありません。

善人になろうとする願ひは尊いことでもあります。聖者になろうとすることは尊いことでもあります。けれども善人になつたつもりや聖者になつた気で、高くとまることほど淋しいものではありません。

特に悪魔のような魂の動きを、善人らしい化粧で包んで、虚偽でかためた自分を、よそ行きの聖者らしい振る舞いで被うて平気でいることは、光明を見ない墮落した日暮らしであります。

「善人になりたい」その心がかもつともつと深く刻まれてゆく時、もう外から善人らしく、聖者らしく見えるようにばかりやつして行くこととする自分には満足できないで、善人になり切れない、聖者になり切れない、悲しい自分を見出さねばならなくなります。

親鸞聖人は、聖者の仮面や、善人らしい化粧を、ぬぎすて洗い棄てたお方であります。聖人が常におおせ遊ばしたお言葉に、「たとひ牛盗人とはいはるとも、もしくは善人、もしくは後世者、もしくは仏法者とみゆるようにふるまふべからず。」とあります。聖人は、内面が空っぽであるにかかわらず「みゆるようにふるまふ」ことをいとわられたのであります。善人、後世者、仏法者、それは聖者のことであります。「たとひ牛盗人とはいはるとも。」牛を盗んで平気で暮す悪魔になれと言われたのではありませぬ。牛盗人だと疑われ、あざけられ、馬鹿められ、罵られ、しいられて暮らすぶんでも、偽善者にはなつてくれなとの御言葉であります。

徹底しなくてはなりません。自分に徹底しなくてはなりません。自分に徹底した老はとも善人らしいことを言つてはいられないのです。聖者らしく高くとまつてゐることは出来ないのです。何をしても勝手だといった風の生活はもちろんいやで

すし、と言つて何でも出来ると言つたようなうぬぼれも悲しいことです。あるがままを、あるがままに生きて行きつつ、静かに光に浄化されて行くのこそ、凡夫として尊い唯一の道でありましょう。目ばかり高いところを見て足もとをふみはずしたり、遠方の虹にあこがれてつまづいたりするよりも、ほんとうの現実の自分にかえつて本尊の前に合掌したいものであります。

愚禿親鸞の生活は、一步一步が凡夫のまま、しかも根強く、力強く大地の上をたとひ牛盗人と見られてさげすまれても、充実した深い魂の落つきを以てお浄土に向つていられました。

昔、けいひん国に離越という尊者がありました。尊者は尊い修行者で阿羅漢であります。常に山の中に座禅していられました。ある時一人の男が牛を失いました。その男が失うた牛のあとを追うて山の中にはいり、尊者のところまで来ました。尊者はその時、草を煮て衣を染めていられましたがたちまち不思議な有様が表れました。染めていられた衣は見る間に牛の皮とかわり、染汁は牛の血に変じ、煮られていた草は牛の肉に見え、尊者の手にあつた鉄鉢は牛の頭に変つてしまいました。

牛飼いはこれを見て尊者を牛盗人だと信じて、すぐ捕えて国王の法廷に訴えて出ました。国王は尊者を罪人として牢屋に入れました。無実の罪でありながら尊者は、すなおに牢獄の仕事に従事して何の言いわけも致しませぬ。監獄の内で、汚い馬糞の掃除などすることが十二年間も続きました。

離越尊者はたくさんのお弟子を持つていられました。阿羅漢のさとりをひらいた者が五百人もありました。お弟子たちは尊者がいらなくなつたので、あちらこちらと探しもとめたが、尊者の行方は知れませんが、けれどもとうとう一人のお弟子が師匠の離越尊者は捕えられて、けいひん国の牢屋にいられることを知りました。

弟子たちはすぐ国王にそのことを申し出で再度のしらべを願いました。王はかかる尊い沙門が牢屋にいると聞いてがっかりして獄中をしらべさせました。けれども尊者らしいものは見あたらなかつたので、役人は獄中にはそんな沙門は一人も見あたらぬ、唯罪人がいるばかりだと報告しました。お弟子たちは更に国王に一切の罪人を出してほしい、そうすればきつと尊者を見出だすことが出来るでしょうから、と言つたので王はその申し出の通り、全ての人に出獄をゆるしました。その時尊者は宿業のはてた時であつたのか、尊い聖なる姿に立ちかえり、空中高くのぼつて神通を現じたので、国王はその不明をはじてゆるしを乞うのであります。

離越尊者は、なぜかかる冤罪を受けながら、訴えもしないでよく忍んだのでしょうか。それについて尊者は、前生のおそろしい業縁、宿業を告白して聞かせました。それはこうである。むかし尊者が牛を飼うていたことがあつた。それを失つた時にそのいなくなつた牛の後を追つて山の中に入りますと、ひとりの辟支仏が坐禅しておいでになつた。尊者はその仏を牛盗人だと疑いしいて、一日一夜ののしりつづけました。その罪の報いによつて尊者は三塗におちて苦しんだが、その因縁がつきないで、今世でまた牛盗人の悪名をうけて牢屋住居をせねばならなかつたのであります、と申しました。

これが雑宝蔵経に書かれてある牛盗人の故事であります。

犯さない罪をきせられて、人々の讒言に苦しまねばならぬことは苦しいことであります。けれども善人らしい仮面をかぶって、内面の空虚をつつんで暮すよりも、讒誣の悪名を負わされて生きて行くところに、深い魂のめざめがあります。

人はよく外面ばかり見て人の価値をきめようとしています。それにつりこまれて外面ばかり善人らしくてろうてごまかそうとします。世の中から悪く言われたり疑われたりすることは、生命をともしれば見失うて形骸だけになって生きようとする私どもにとつて、生命のめざめのための警鐘であり、注射であります。酔いからさめて、生命に蘇ることは尊いことであります。

世の中から罪なくして謗られた時、常の人だつたらただ怒るだけでありましょう。親鸞聖人の常の仰せの一つに、信順を因となし、疑謗を縁となす、とあります。聖人は信心を心の中に貯えられて、世の人の疑謗を御縁に、法悦を味わつていなさつたのであります。

ほんとうに魂が目覚めた者は、世の中の疑いや、そしりに対しても、自分の深い宿業を思います。そうしてそれにつけても、いよいよありのままを救いたもう大悲の尊とさを味わうのであります。

親鸞聖人の御一生は華やかではないかも知れませんが、けれども、その一步一步は大3地についていました。人師ぶつてきたない自分を美しく装つて人に拝ませようとして、貧弱な自分をてろうて賢善の風を見せようとする、説教師ではなかつたのであります。そのままが真実でありました。お浄土まで歩ませらるるものは虚偽の自分を見てすすりなきます。そうしてつけ上つて聖者ぶることも出来ねば、宿業をそのまま仏だとも考えませぬ。宿業のありつたけをみ仏の前になげ出して救われてゆく、神秘的な法悦の内に生きてゆきます。

感想

あなたは何処から来たのです。
今から何処へ行くのです。

親切な電車の車掌さんは、長い間交叉点に立っている可愛い朝鮮の少女に問いました。

白い上衣に黒い袴、内地娘の髪をまいた可愛い朝鮮の少女は、やつぱりだまつて立っています。

「天満町へ行くのですか。」

「わかりません。」

「天神町ですか。」

「……」

可愛い少女は何も言わず、重い荷物を持ったままじつと電車を見ています。「書いてごらん。」

車掌は紙と鉛筆を出して問うたので、「田」と一字書きました。田というのはどこだろう。居ならば人は誰も皆「田」というのはどこだろう。」と、可愛い少女を思う心から考えあいました。

下うつむいた少女の眼からはポタリと涙が流れます。

暑い真夏のま昼に動きもしないで立っている。少女は一体どこへゆく。

親はないのか、知人はないか、何時までそうして立っている。

悲しい時もあります。楽しい時もあります。悲しい時には地に伏して泣き、嬉しい時には天を仰いで笑うことの出来る者は幸福であります。赤裸々な人間になったことは嬉しいことです。

受けることは与えることよりもむずかしいと思われれます。もし与えるならいい気持ちで与えたいと共に、受けるにもいい気持ちで受け得る人になりたいと存じます。仏は何でも受け得る広い心と徳を持つていられます。

言うということはむずかしいことではありますが、静かに他人の言うことを聞くことは、更に出来がたいことであります。腹に一物ある時には、他人の話を聞いて育てられて行くことは困難です。聞くことの出来なくなった人は、しんのとまった人でありません。

私は老人がすきであります。髪の毛のまばらな皺のたたまれた願を見ておると、涙ぐましい気になります。あの敏一本も容易では出来ないのです。

しめくくりのない人は嫌がられます。人のものをあてにして平気な人、だまつて他人のものを使う人、他人のものほど粗末に使う人、自分の手拭と他人の手拭の見分けのつかぬ人、友人同志でも会計を確かめない人、そうした確かさをかいだ人は、一語にことをすることを嫌がられます。

腹が立つ時、痛快なほど敵討がしたいのは人間の心です。けれどもせい一ぱいやりつけねばおかぬ人は呪われた人です。もし忍んだら後から嬉しい心が湧いて来ます。

もう秋になりました。村の祭の太鼓の音が昔ながらにしめやかに、神秘に響くのを思い出せます。